名古屋女子大学　紀要　59（家・自）1～12　2013

大学生の「家庭科」に対するイメージにみる男女共修家庭科の意義と課題

藤田　智子

Significance and Issues of Coeducational Home Economics at the University from the Viewpoint of the Students' Conception of Home Economics

Tomoko FUJITA

緒言

家庭科が1994年に男女共通必修（以後，男女共修）となってから15年以上が経過した．戦後の教育改革によって，家庭科は，それまでの女子教育，家事・裁縫教育から脱却し，民主的な家庭について男女で学ぶべき教科として新たに誕生した．だが，その後，学習指導要領が改訂されるたびに，家族・家庭に関する学習は軽視されモノ中心の学習内容となった。さらに，中学校では技術・家庭科が男子向き・女子向き教科とされ，高等学校では女子のみ必修と，男女で学習内容も分けられていった．

男女共修家庭科の実現に向けて，1970年代には「家庭科の男女共修を進める会」をはじめとする家庭科教育関連団体の働きかけもあり，一部の自治体では男女共修家庭科が行われ始めた．その後，女子差別撤廃条約に批准するための法整備の一つとして，家庭科は男女共修となった．

学習指導要領改訂のたびに家庭科の扱いは議論にあがり，実質的な授業時間数の減少という問題も生じているが，現在のところ，小中高等学校において男女共修が実施されている．学習内容も，家族の多様化や少子・高齢化が進むにつれ，家族・家庭生活に関する学習が重要視される方向に変わってきている．家庭科教育は，家族・家庭生活について社会とのかかわりの中で考え，基礎的・基本的な知識・技術を身につけ，自立した生活者として主体的に家庭生活を営む能力を身につけるための教科といえる．その際，家庭の仕事＝女性の役割とせず，男女が協力して家庭生活を営むことが求められる．[1）2）3）]

そのような中，家庭科の男女共修の意義を問うべく，学習者と教員の両方の立場から，男女共修に対する考えや男女共修家庭科での学びに関する研究が行われてきた．まず，学習者の立場にある（あった）生徒・学生・社会人に対する調査研究をみていく．

男女共修家庭科が実施される以前に，独自の取り組みとして男女共修が行われていた大阪府の高等学校で，「家庭一般」を履修した男子生徒と，履修していない男子生徒の比較を行った結果，履修した男子生徒は，家庭科の男女共修に賛成であること，男女で協力して生活していこうという意識が高いこと，生活における実践的態度が高いことが明らかにされている[4)]．男女共修家庭科となった直後に行われた荒井・鶴田[5)]の調査では，男女共修家庭科の履修経験がジェンダー・エクイティ意識の形成に関連しており，特に男子において顕著であることが明らかにされている．

男女共修家庭科の実施前と実施後における，高校生男女の家族・保育に関する意識などを比

較した中西の研究[6）7）8）]では，男女共修家庭科を履修した高校生は，多様な家族形態・結婚形態を受容し，自分の家族や高齢者に対しても好意的な態度を持ち，ジェンダー・エクイティ意識の形成によって家事参加率も高く，高齢者や自身が高齢化することをポジティブに捉え，親準備性も高いことなどが明らかにされている．特に男子高校生において，家庭科の履修経験の有無による差が大きく，女子も共学校においては，男女共修で学んでいる場合，多様な家族観を受容し親準備性も高いといった差がみられた．共修施行前後の生徒の意識を比較調査した大竹・今藤[9)]によると，家庭科の学習をした男子（男女共修施行後）は，学習をしなかった男子（施行前）より，家庭科観・性別役割観が革新的でジェンダーフリーの傾向があった．男子においては，共学校で学んだ場合も男子校で学んだ場合も同じ傾向がみられた．しかし，女子では，男女共修以前にはジェンダーフリーの傾向が比較的強かった共学女子において，男女共修後，その傾向は弱くなっていた．

社会人を対象とした調査においても，家庭科を学ぶ意義が認められていることが報告されている[10) 11)]．また，高校生と社会人の調査結果の比較から，男女共修家庭科を学んだ男女は性別役割分業意識に対して否定的であり，特に男性においては多様な家族観を持ち，自分の家族に対しても好意的であることが指摘されている[6）7）8)]．

教員に対する調査研究においては，以下のようなことが明らかにされている．

家庭科の男女共修が始まる以前の1978-1979年に調査を行った片山[12)]によると，男女共修に対して，家庭科教員自身もあまり積極的に賛成してはいなかった．男女共修になることによる教材研究の負担増・教員数や施設の不足など，実施に伴う困難さを危惧していたようである．一方，男女共修実施後に，教師の生活主権者意識と家庭科観等を調査した荒井ら[13)]によると，男女共修家庭科によって深められた内容は，男女平等への理解や性別役割分業，家族関係であると認識している割合が，家庭科教員は他教科の教員に比べて高いことが明らかにされている．家庭科教員免許状を取得しようとする女子大学生の家庭科に対するイメージにおいても，家庭科は女子が学ぶ教科であるというイメージが減少していること，生活主体を育成する教科であると認識されるようになったことが指摘されている[14)]．

男性家庭科教員に関する調査では，男性家庭科教員に教えられた経験をもつ高校生は，家庭科＝女性教員といった固定観念がみられる割合が小さく，ジェンダー・バイアスが低い傾向があった．特に男子生徒は，男性家庭科教員に教えられた場合，家庭科を好んだり熱心に学習したりする傾向があることも明らかになった[15)]．

以上のように，家庭科の男女共修には一定の成果が認められており，特に家族観や性別役割分業意識に対する影響は大きく，現在の社会状況に合った意識が形成されている．実施前は不安を抱いていた教員も，家庭科の男女共修によって生活者としての意識形成が進んでいると考えるようになり，男性教員も学習者に好ましく受け止められている．

だが，家庭科のイメージには根強いジェンダー意識があり，家庭科教育の必要性についても，「現在」ではなく「将来」の家庭生活に対してあるという考えが強いことも，中西[16)]によって指摘されている．また，高校生の家庭科に対する認識をインタビュー調査から明らかにした研究によると，家庭科は男子にも必要ではあるが，特に女子にとって重要な教科であると高校生は認識しており，背景には，家庭科教員に女性が多いことや，家庭内のことは全て母親がやり，父親は不在であるといったことがあった[17)]．

「学習にどのような意味や意義を感じているか」という「学習レリバンス」は，学習そのものを面白いと感じる「現在的レリバンス」と，学習が将来役立つといった感覚である「将来

的レリバンス」の2つに分かれるが，両者のレリバンスがあった場合，男女とも継続的な学習を促進する意識が高く，男子においては教育達成の度合いが高くなることが明らかにされている[18]．つまり，生徒たちが学ぶ意義をどのように感じているかということは，生徒の学力や学習意欲と深くかかわるといえる．教える側の教員がどのように家庭科の意義を考えているかによって，学習者の認識は左右されるとも考えられる．家庭科教育の在り方を考える上で，学ぶ側である生徒や教える側になる大学生たちの家庭科に対する認識を，常に問い続けていく必要性があるといえるであろう．

よって本研究は，男女共修家庭科を学んできた大学生たちの家庭科及び男女共修家庭科に対するイメージを分析し，先行研究の結果との比較を通し，男女共修家庭科の今後の在り方について考察することを目的とする．特に，将来教員になることを目指している教育学部の学生に焦点をあてる．

研究方法

男女共修家庭科を学んできた大学生たちの家庭科に対するイメージを明らかにするため，以下の方法をとった．

［調査概要］

調査対象：関東の私立大学Ａと国立大学Ｂの教育学部に通う大学生で，初等家庭科教育法を履修している141名（女子78名，男子63名）を対象とした．２年生向けに開講された授業であり，初等家庭科教育の内容については既に学んでいるが，家庭選修の学生はいない．授業中に実施したこともあり，回収率は100%で，未記入の項目はなかった．

調査時期：2010年４月及び10月（各大学の初回授業時）

調査方法：調査は，先行研究[14) 16)]と同様に，「『家庭科』というと…」「男の子にとって家庭科は…」といった書きかけの言葉の後に思いついたことを続けて文章を完成させる，文章完成法を用いた．

［調査内容］

質問紙には，「次の書きかけの文章を読んで，それに続けて，思いつく言葉を書いて文章を完成してください．あなたの頭に最初に浮かんだことをそのまま書いてください．」という発問の後，13個の質問項目を設定した．そのうち，本研究で用いるのは，「『家庭科』というと…」「女の子にとって家庭科は…」「男の子にとって家庭科は…」「家庭科の男女共学は…」の４項目である．

［分析方法］

中西[16)]の分類を参考に項目を設定し，記述を分析した．回答数をカウントする際，複数の項目の内容を含む場合は，それぞれの項目でカウントした．また，割合は，各性別の人数に対する割合を求めた．

結果と考察

１．「家庭科」というと一番に思い浮かぶもの

まず「『家庭科』というと…」に続けて書かれた文章を分析した．質問紙でも一番上にある項目であり，「家庭科」と言われて最初に思い浮かべることといえる．記述内容は，先行研究と同様に，学習内容について書かれたものが多かった．学習内容に関する記述と，学習内容以外に関する記述に分けてみていく．

（1）学習内容

学習内容について書かれたものを分析した結果が図１である．男女とも,「調理・料理」が最も多く約４～５割の学生が回答した．次に,「裁縫・被服」が約２～３割と続き，家庭科は調理と裁縫というイメージがあるようである．これは先行研究と同じ傾向である.「衣食住」という回答は1割程度あったが，単独で住居に関する記述はみられなかった．また,「家族・保育」に関する記述は，男子でごくわずかにみられたが，女子にはみられなかった.「お母さんが家でやる家事」（女子）といったように，学習内容に性別役割分業意識が伴った記述もみられた.

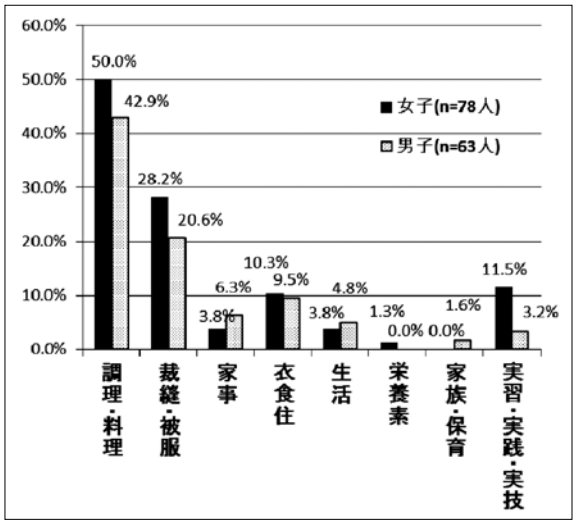

図１　大学生の「家庭科」に対するイメージ（学習内容）

また,「調理」といっても, 単に「調理」「調理実習」という記述の他,「調理実習とかがあっておもしろい」（女子),「調理実習でクラスの人と仲良くなる」（男子),「調理の仕方など, 女性としての役割（?!）みたいなものを学ぶ」（女子）といったように異なったイメージをもっており，学ぶことそのものをおもしろいと感じる「現在的レリバンス」や，調理実習を通して何を学ぶのかといった記述がみられた．授業でクラスメート共に学ぶことは，協働の学びであるほか,「女性らしさ」の獲得も行われているようである.

（2）学習内容以外

次に「家庭科というと…」に続けて書かれた文章のうち，学習内容以外に関する記述を分析した結果が図２である.「生活に役立つ」「生きていく上で必要」といった記述が女子の約３割，男子の１割強でみられた.「将来役立つ」といった記述は，少数だが女子にみられ,「好き・楽しい」は女子で約１割，男子では５％程度であった.

「女子の教科」と回答したのはごく少数で，先行研究と比較しても少なかった．男女共修が当たり前のものと認識されていると考えられる.「軽視されてい

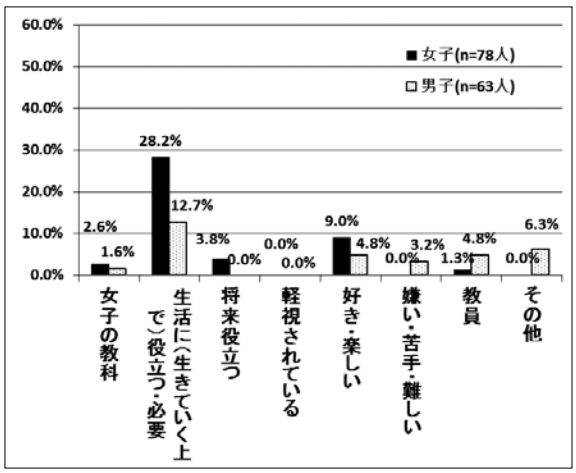

図２　大学生の「家庭科」に対するイメージ（学習内容以外）

る」といった記述はみられず，「嫌い・苦手・難しい」といった記述もごく少数であった．

「教員」としては，「先生は女」といった記述のほか，大学で家庭科教育内容を担当している教員名もみられた．「その他」としては,「授業が少ない」「クラスの人と仲良くなる」「楽」「勉強という気がしない」といった記述があった．

２．家庭科の男女共修への意識

次に家庭科の男女共修に対するイメージを分析した（図３）．「家庭科の男女共修は…」に続く言葉として，「良い・大切・必要」といった記述が女子で約８割，男子で約７割みられ，「当然」「当たり前」といった記述が，女子で約１割，男子で約２割みられた．「どちらかと言えば良い」も含めると，肯定的な記述が女子で約90%，男子で約95%となり，否定的な意見はみられなかった．男女共修開始から15年以上経った現在，大学生たちは，家庭科の男女共修は当然と考えているようである．

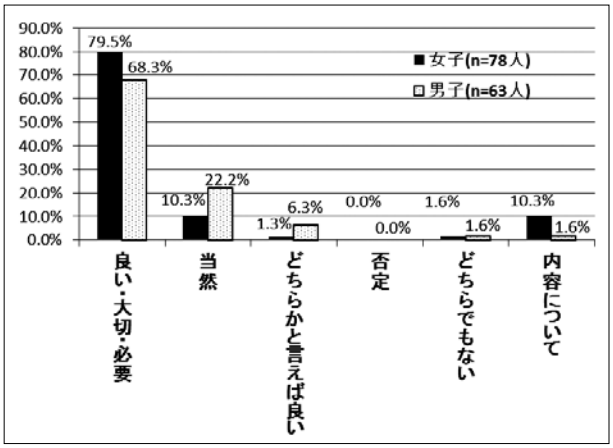

図３　家庭科の男女共修に対する考え

家庭科の男女共修について肯定的な意見が大半を占めたが，どのような理由で肯定的に捉え

表１　家庭科の男女共修を肯定的に捉える理由

男女とも同じように学ぶ必要がある	性別
当然・当たり前・ふつう	男子(9名)
必要。ジェンダーフリーとかあるし。	男子
あたりまえのこと。男女に関係なく、自立した生活を行うためには学ばなければいけない。	男子
大賛成。男女の差を気にしない風潮もあることだし。	男子
男女問わずやる必要があると思う	女子
必要だと思うが、男女どちらともが興味を持つような授業とする必要がある	女子
絶対賛成!!男だから～、女だから～の時代は終わった	女子
性別に関係なく、学ぶことが大切	女子

男女で考えや能力に違いがあるからこそ、共に学ぶべき	性別
(男女)お互いのウィークポイントを補えるから良いと思う	男子
女性力をアピールするチャンスだと思う	男子
男女の得意、不得意が理解できる機会になる	男子
お互いにできることを分担して補い合える	女子
それぞれの価値観の違いが見られて楽しい	女子
お互いが助け合ったり（力仕事？は男の子、わからなかったら女の子に聞く）	女子

ているのか，具体的な記述内容をみていく．記述の一部をまとめたものが表1である．「ごく自然なこと」「あたりまえのこと．男女に関係なく，自立した生活を行うためには学ばなければいけない」といったように，「男女とも同じように学ぶ必要がある」と考えているからこそ，男女共修を肯定的に受け止めている記述がみられる一方，「お互いにできることを分担して補い合える」「それぞれの価値観の違いが見られて楽しい」といったように，「男女で考えや能力に違いがあるからこそ，共に学ぶべき」という記述もみられた．男女共修に対して肯定的であるといっても，異なる意味があることに注意すべきであろう．

３．男女にとっての家庭科の意味

男女共修に対しては大部分の学生が肯定的に捉えていたが，その理由として，生活者として男女共通に必要であるという考えと，男女が違うからこそ必要といった考えがみられた．では，家庭科が男女それぞれにとって，どのような意味を持つと考えられているのであろうか．

（１）女子にとっての家庭科

まず，「女子にとっては…」に続けて書かれた文章を分類したところ（図４），「必要・役に立つ・大切」という記述が，女子で28.2%，男子で34.9%であった．「将来必要，花嫁修業・母親準備・主婦準備」という記述が，女子で50.0%，男子で31.7%であり，その内訳は，「将来必要」が女子で23.1%，男子で15.9%，「花嫁修業・母親になる準備」が女子で21.8%，男子が9.5%，「自立のため」が女子で5.1%，男子が6.3%と，女子にとっての家庭科は，将来自立するというよりは結婚後のために必要であると，特に女子自身に認識されているようであった．

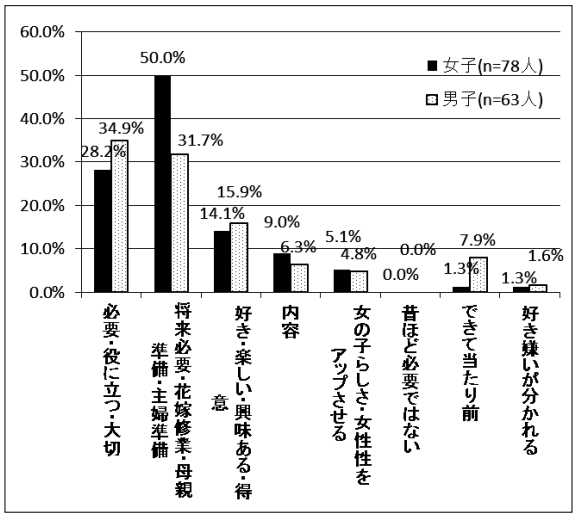

図４　「女子にとっての家庭科」のイメージ

また，「好き・楽しい・興味ある・得意」という記述は男女とも約15％と同程度であるのに対し，家庭科が「できて当たり前」という記述は，女子では約１％，男子では約８％と，女子自身ではなく男子から認識されていた．

（２）男子にとっての家庭科

次に，「男子にとっては…」に続けて書かれた文章を分類した（図５）．「必要・役に立つ・大切」は女子26.9%，男子23.8%，「将来必要」は女子26.9%，男子11.1%であった．

「嫌い・退屈・無関心・苦手」は女子19.2%，男子11.1%と，男子自身より，女子の方が思っていた．これは「女子にとっては…」ではみられなかった記述内容でもある．

一方，「楽しい・得意」という記述が女子で1.3%，男子で11.1%と，女子が思うより，男子自身は家庭科を楽しく得意だと認識していた．女子から「興味を持つチャンス」というイメージをもたれており，男子は，日常生活において，家庭科的内容に興味を持ったり学んだりする機会があまりないと考えられているようである．

「自分磨き，付加価値」に分類したもののうち，付加価値にあてはまるものは，「できなくてもいいが，できたら好かれる」「プラスα」「あったらあるだけいいもの」といった記述である．

女子は「必要」で「できて当然」なのに対し，男子の場合は，「できない・得意でない」というイメージからスタートするため，「できる」ということが特別な価値を持つということであろう．

前項の結果と照らし合わせると，男女どちらにとっても，家庭科は「必要・将来必要」と考えられていた．だが，女子にとっては，妻として，母としての役割への期待がみられ，「将来」「結婚後」必要であると，女子自身が家事や育児を担っていく自分の姿をイメージしており，性別役割分業意識を受容していた．また，女子は男子から「できて当然」と思われており，男子は女子から「苦手」であると思われていた．男子自身は「楽しく得意」と感じていたが，女子にはそう思われていなかった．それぞれの性別における家庭科に対する認識にずれがあるといえる．

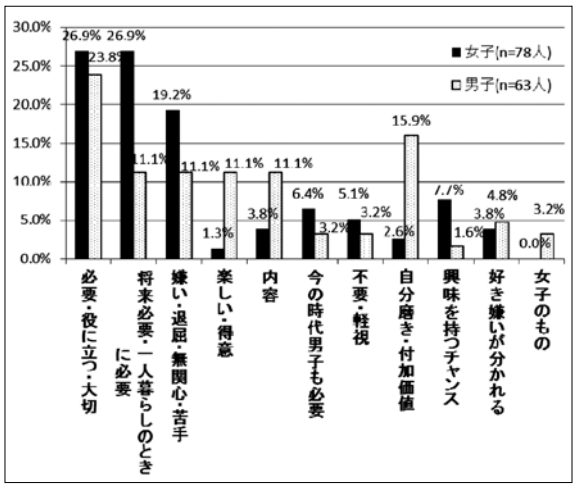

図５　「男子にとっての家庭科」のイメージ

（３）男女で家庭科の意味が異なるとみなされているのか

さらに，男女で家庭科の意味が同じだと考えているのか，異なると考えているのかを明らかにするため，「女の子にとって家庭科は…」と「男の子にとって家庭科は…」の記述を同じように書いていたか，区別して書いていたかを分析した．「男女とも同じように必要」「女子向き」「男子に特に必要」「男女とも必要だが意味が違う」の４つに分類した結果が，図６である．その具体的記述を整理したものが，表２～５である．

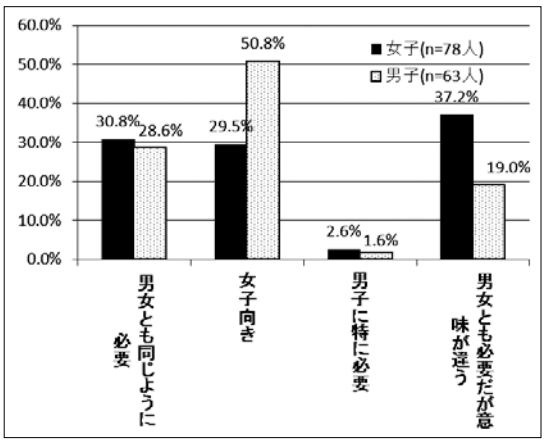

図６　「女子にとっての家庭科」と
「男子にとっての家庭科」に違いはあるか

男女とも約３割が男女で意味が同じと考えていた．「大切」「必要」といった記述が大部分であり，自立した生活を営むためと，家庭を持った場合のための両方に，家庭科は必要と考えていた（表２）．性別役割分業意識にとらわれず，生活者として自立していく上で，家庭科は男女とも同じように必要と考えているようである．

女子の約３割，男子の半数が，「女子向き」であり「女子にとっての方が重要」と考えていた．具体的には，女子は，好きで，楽しく，得意であるのに対し，男子は，つまらなく，苦手であるというイメージを持っていた（表３）．また，女子にとっては，女性としての魅力を上げることができ，将来，家庭を持った時に必要というイメージがあった．「女子にやることをとられて，何もやらずボーっとしている」や「調理実習では役立たず」といった男子の記述から，家庭科の時間は女子がリーダーシップをとり，活躍できる貴重な場であると同時に，「女子の

表２　家庭科は「男女とも同じように必要」という認識

「女の子にとって家庭科は…」「男の子にとって家庭科は…」	性別
大切	男子(2名)
必要	男子(5名)
自立して生活していく上で必要	男子
将来の役に立つ	男子
現代社会において、女の子だから、男の子だからという差別的な見方はせず、誰にとっても一様に、生きる力を養えるものであるべきだと思う。	男子
必須	女子
必要	女子(3名)
将来、家庭を持ち、子どもを育てる上で必要なこと。自立して暮らしていく上で必要なこと。	女子
自活していくための基礎	女子
家庭に入った時や一人暮らしをしたときに困らないようにする	女子
女の子にとっても男の子にとっても、家庭科は日常生活に欠かせないもの	女子

表３　家庭科は「女子向き」の教科という認識

「女の子にとって家庭科は…」	「男の子にとって家庭科は…」	性別
おもしろい（であろう）もの	つまらないもの	男子
好き	女子のための授業じゃない？	男子
活躍の場	調理実習では役立たず	男子
とても大切	とても難しい	男子
女子力向上に役立ちます	つまらない教科です	男子
花嫁修業、（将来のため）必要	不必要	男子
男の子よりも得意	ほとんど自由時間	男子
男子より出来が悪いと恥をかくかもしれない。	女子にやる事をとられて、何もやらずボーっとしている。（特に調理系）	男子
男の子よりは上手くできるはずだと思われてしまいがちなもの	案外、上手くできるもの	男子
楽しいと思っている	苦手だと思っている	女子
楽しい	難しい	女子
楽しい教科（調理実習や裁縫などが）	つまらない教科…かも？	女子
ある程度できて当たり前なイメージ	めんどうくさい教科	女子
将来の生活に役に立つ	将来、家事を手伝ううえで大事なこと	女子
将来家庭をもつ時のための勉強	教科としてだけの勉強	女子
出来ると男を落とす武器になる！笑	プラスα	女子
家庭的な女性になるために最も必要と考えられている	女の子の修行の場と考えられている	女子
女らしさをみがく所	調理実習（食べ物）が全てだった気がする	女子

ための教科」というイメージを強化してしまっている恐れもある．一方で，男子にとって「案外うまくできるもの」と男子自身が記述しているように，男子であるからといって，家庭科が苦手でつまらないわけではないといえるであろう．女子は好きで得意，男子は嫌いで苦手といった固定観念に縛られないことが，まず必要でなかろうか．

「男子に特に必要」という記述を行った学生もわずかながらいた．「今の時代」「これから」

というように，時代の要請に合わせて男子にも必要と考えていた（表４）．また，家庭で教えられることが少ないからこそ，女子以上に必要という記述もあった．先に取り上げた先行研究においても，特に男子において家庭科の学習効果が認められており，これは，男子は家庭科を積極的に学ぶ機会がなかったり，家庭でも必要がないとされたりと，学ぶことから疎外されてきたからこそともいえるであろう．

表４　家庭科は「男子に特に必要」という認識

「女の子にとって家庭科は…」	「男の子にとって家庭科は…」	性別
将来必要	今の時代必要	男子
絶対必要	女の子以上に必要かも。だって家で母親も教えなさそう。	女子
必要不可欠	こらからもっと必要になると思います	女子

男女とも必要だが意味が違うと考えていた学生は，女子で約35%，男子で約２割であった．記述内容としては，妻として，母として，家族員のために家事をこなす上で女子は必要であり，男子は，結婚するまでや，結婚しなかったり一人暮らしをしたりする上で必要，もしくは結婚後，妻を手伝うために必要と考えられていた（表５）．また，「親の苦労や周りの人たちの支えを認識する」といったように，母や恋人，将来の妻から，家事・育児をやってもらうことを当然であると，男子は考えているようである．

表５　家庭科は「男女とも必要だが意味が違う」という認識

「女の子にとって家庭科は…」	「男の子にとって家庭科は…」	性別
自分のため	愛のため(女性を手伝うため)	男子
将来的に家庭を持った際の生きていく術として大切である	固定観念にとらわれずに、学ぶべきものである	男子
将来あるいは現在家庭生活を営む上で不可欠である	親の苦労や周りの人たちの支えを認識するのに有効な教科である。	男子
花嫁修業	出来る男への第一歩	男子
花嫁修業	独り暮らしで必要になる	男子
家族との関わりを考える教科	一人でも生きていけるようにする科目(笑)	女子
母になるために必要なことを勉強する	一人でも生活できる必要最低限を勉強するもの	女子
将来、家庭を持って、家事をやるために学ぶこと	自立して１人でもある程度の生活ができるよう学ぶ	女子
主婦になった時に役立つ	軽視されがちだが一人暮らしをするときはとても役立つもの	女子
将来の生活に役に立つ	将来、家事を手伝ううえで大事なこと	女子
花よめ修行	普段やらないことを学ぶよい機会	女子
将来的に役に立つ	衣・食・住に興味を持つチャンス	女子
将来家庭を持ったときに、家事全般ができるために必要	家の中に目を向けるために大切な教科	女子

前節の男女共修家庭科に対する意識を分析した結果と照らし合わせると，９割以上が男女共修について肯定的であったが，同じ意味で男女共に学ぶべきだと考えている学生は３割にとど

まる．男女共修家庭科に肯定的であるからといって，必ずしも家庭科を学ぶ意義を十分に理解し，ジェンダー・バイアスに縛られていないわけではないことが分かる．

まとめ

家庭科は，主に「調理・料理」「裁縫・被服」について学ぶ「生活に役立つ」教科として，大学生に認識されていた．「女子の教科」といった記述は，先行研究と同様に少なく，家庭科の男女共修についても9割以上が肯定的に捉えていた．家庭科の必要性，家庭科の男女共修の意義は認識されているといえる．

だが，男女両方にとって家庭科は必要であると考えられていたが，その理由として，生活する上で男女共に学ぶことが必要という認識と，女子にとっては「花嫁修業・母親になる準備」として必要であるが男子にとっては一人暮らしや家事を手伝うために必要といったように，女性の役割を身につけたり理解したりするための共修という認識がみられた．

女子にとっての家庭科は，「将来必要，花嫁修業・母親準備・主婦準備」であるという回答割合の多さは，先行研究と比較しても顕著である．中西[16]と比較すると，「必要・役に立つ・大切」と「将来必要，花嫁修業・母親準備・主婦準備」の回答割合が逆転している．

つまり，大学生の家庭科に対するイメージとして，根強いジェンダー意識があるといえる．家庭科は，今の生活に役立つというよりは，将来への役立ち感の方が強く，その際，イメージされているのは，「妻」として「母」としての女性の姿であり，将来への役立ち観とジェンダー意識が絡み合っているといえる．

男女共修になったというだけで，ジェンダー・バイアスのかかった意識が低くなるわけではない．先行研究においても，男女共修によって共学校女子の性別役割分業意識が高くなっていた[9]．本研究においても，女性らしさをアピールする場，女性の役割を理解する場，女性が積極的に活躍する場といったイメージがみられたように，男女共修が性別役割分業意識を強める結果になる場合もあるのである．教員が，「女子は…，男子は…」とジェンダー・バイアスのかかった言動をしてしまうこともあるであろうし，家庭内における性別役割分業はなかなかなくならないため，家庭からの影響も大きいであろう．

調理や裁縫が苦手である女子による，「できて当然」であると思われて苦しかった，うまくできなくて辛かったという記述もみられた．一方で，男子は，女子がイメージするよりも家庭科を「楽しい・得意だ」と感じていた．家庭科の教育内容に対する得手・不得手，好き・嫌いは，性差ではなく，あくまでも個人差である．「男女で協力して生活を営む」といった場合，性差を活かして協力し合うということではなく，個々人の能力や特性，家庭の状況に応じて協力し合うということなのである．それを理解できるような家庭科／家庭科教育法の授業を行っていく必要があるであろう．

男女共修家庭科の必要性は大学生たちに認識されていることが，本研究において明らかにできた．だが，改めて男女共修の意義を確認するとともに，小・中・高等学校の学校教育現場で，共修の意義をより意識した授業を行うことや，大学での教員養成においても，男女共修の意義を伝えて続けていく必要性があるといえる．

今後の課題

今後の課題として，まず，各項目間の関連の検討が挙げられる．本研究では，文章完成法を用い学生自身の言葉を分析した．その結果，「必要」といった場合にも，自立のために必要という認識と，将来，妻や母として在るために必要といった認識に分かれていることや，男女共修に賛成であるからといって，共修の意義を十二分に理解しているとは言い難いことなどが明らかになった．だが，記述内容を分類する際，複数の項目にまたがるものが多数あり，項目間の関連の分析を行うことができなかった．今回の分析結果を基に，項目間の関連がみられるような変数を設定し，分析モデルの構築・検証を行いたい．

次に，家庭科の学習経験による比較・分析が挙げられる．家庭科は，「生活」を取り上げるため学習内容も幅広く，個々の教員によって用いる教材や授業の進め方が大きく異なると考えられる．また，高校家庭科は，２単位の家庭基礎と４単位の家庭総合を選択している学校がおよそ半々である．授業時間数が倍違うということは，家庭科での学びに対する深まりも違うと考えられる．男性教員に習った経験が，ジェンダー意識に大きく影響することも先行研究で明らかにされており，習った教員の属性と家庭科のイメージとの関連も分析すべきであろう．

今回は，教育学部の家庭選修でない学生のみを対象としたが，家庭選修／家政学部の学生との比較や，学生の専攻ごとの比較も必要であろう．小学校ではクラス担任制をとっている学校が多いため，一人の教員が自分の専攻にかかわらず全ての教科を教える場合が多い．家庭選修／家政学部の学生には，家庭科の意義を十分に理解していて欲しいが，他専攻の学生も家庭科を教える可能性がある以上，同様の理解が必要であろう．専攻ごとにどのような特徴があるのか明らかにすることで，より効果的な家庭科教育法の授業を行うことができると考えられる．

家庭科教育法の履修前後での比較も行いたい．本研究において，「『家庭科』というと…」という文章に続けて大学教員の名前を記述した者がわずかながらいた．直前に授業を履修していたためだと思われるが，学生は大学での学びにおいても，その教科のイメージを形成しているとも考えられる．授業の前後で比較することによって，教員養成において，家庭科についてどのような学びが必要であるか示唆を得たい．

文献

１）文部科学省：小学校学習指導要領解説　家庭編，東洋館出版社（2008）
２）文部科学省：中学校学習指導要領解説　技術・家庭編，教育図書株式会社（2008）
３）文部科学省：高等学校学習指導要領解説　家庭編，開隆堂出版株式会社（2010）
４）貴田康乃・増田久子：高校家庭科男女共学に関する調査研究（第１報）――「家庭一般」履修の男子高校生の学習効果，日本家庭科教育学会誌，30・2，1-6（1987）
５）荒井紀子・鶴田敦子：男女共学家庭科の履修と高校生の意識（第１報）――ジェンダー観をめぐって，日本家庭科教育学会誌，39・2，39-46（1996）
６）中西雪夫：男女共通必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響（第１報）――家族・結婚に関する意識の変化，日本家庭科教育学会誌，44・4，336-346（2002）
７）中西雪夫：男女共通必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響（第２報）――性別役割分業観・家事参加の変化，日本家庭科教育学会誌，44・4，347-353（2002）
８）中西雪夫：男女共通必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響（第３報）――高

齢者観・親になることへの準備状態の変化，日本家庭科教育学会誌，44・4，354-360（2002）
9）大竹美登利・今藤綾子：大学生の家庭観・性役割観に与える高校家庭科男女共修の影響，東京学芸大学紀要．第６部門，技術・家政・環境教育，53，51-57（2001）
10）増田久子・貴田康乃：高校家庭科男女共学に関する調査研究（第2報）――男子社会人によってみた家庭科履修の効果，日本家庭科教育学会誌，31・3，25-32（1988）
11）貴田康乃・増田久子：高校家庭科男女共学に関する調査研究（第３報）――男子社会人が望むこれからの家庭科，日本家庭科教育学会誌，31・3，33-40（1988）
12）片山登美子：中学校・高等学校における家庭科男女共修の問題――家庭科担当教師の意見を中心に，日本家庭科教育学会誌，24・1，1-8，（1981）
13）鶴田敦子・荒井紀子・原澤智子：男女共学家庭科の実施と教師の意識（第2報）――生活主権者意識と家庭科観をめぐって，日本家庭科教育学会誌，41・2，41-48（1998）
14）永田晴子：女子大学生の家庭科イメージの変化――教職課程履修者の場合，お茶の水女子大学人文科学紀要，56，263-284（2003）
15）吉野真弓・深谷和子：男性家庭科教員の意義と役割――生徒のジェンダー形成とのかかわりで，日本家庭科教育学会誌，44・3，242-252（2001）
16）中西雪夫：家庭科男女共学はどんな成果を上げているか，青少年期の家族と教育――家庭科教育からの展望，107-114，家政教育社（2006）
17）藤田智子：青年期の身体像と食生活への日常知と学校知の影響――高校生へのインタビュー調査より，格差センシティブな人間発達科学の創成公募研究成果論文集，8，59-71（2009）
18）本田由紀：学ぶことの意味――「学習レリバンス」構造のジェンダー差異，学力の社会学――調査が示す学力の変化と学習の課題，77-98，岩波書店（2004）

要旨

本研究の目的は，男女共修家庭科を学んできた学生たちの家庭科及び男女共修家庭科に対するイメージを分析し，先行研究との比較を通し，男女共修家庭科の今後の在り方について考察することである．調査は，関東地方の私立大学Ａと国立大学Ｂの教育学部に通い初等家庭科教育法を履修している大学生141名（女子78名，男子63名）に対し，文章完成法で行った．時期は2010年４月及び10月（初回授業時）である．先行研究に基づき項目を設定し，記述を分析した．

その結果，家庭科は「調理・料理」について学ぶ「生活に役立つ」教科と認識されていた．だが，女子は「花嫁修業・母親になる準備」として必要であるのに対し，男子は一人暮らしや家事の手伝いのために必要と認識されていた．家庭科の男女共修に対し９割以上が肯定的であったが，理由として男女共に同じ価値があるという記述と，男女で考えや能力に違いがあるからこそ共に学ぶべきという記述があり，根強いジェンダー意識と，それに伴う「将来」への役立ち観がみられた．小・中・高等学校の学校教育現場で，共修の意義をより意識した授業を行うことや，大学での教員養成においても男女共修の意義を伝えて続けていく必要性があるといえる．